

「昇平宝筏」と京劇「大鬧天宮」 —李天王の歌詞を比較する—

加藤 徹(明治大学) <http://www.geocities.jp/cato1963/>

平成25年3月9日(土)15:45～16:15 仙台市戦災復興記念館

(レジュメ 全17頁)

1-1.要旨 1-2.略史

2-1.歌詞の比較対照(1)版本一覧 2-2.歌詞の比較対照(2)李天王(ら)が唱う点絳唇の歌詞

2-3.歌詞の比較対照(3)李天王が唱える七言詩 2-4.歌詞の各句の比較分析

3.むすび 4-1.附録(1)各版本の写真 4-2.附録(2)映画 4-3.附録(3)来日公演

1-1.要 旨

昔の京劇界では「唱死天王累死猴」という言葉があった。「鬧天宮」の舞台では、李天王は激越な高い声で唱うので演ずる役者はのどが辛くて死にそうになり、孫悟空は立ち回りが多いため役者は体が疲れて死にそうになる、という意味である。逆に言うと、李天王の「唱段」は、「鬧天宮」の見せ場の一つであった。

清朝宮廷劇の後世への影響の一例として、「鬧天宮」(現在は「大鬧天宮」とも)の李天王の歌詞の字句の変遷を取り上げる。張照(1691-1745)の『昇平宝筏』故宮本・大阪本と、清末の『梨園集成』、民国期の『戲考』、現行の京劇脚本の該当部分の字句の異同を比較し、考察を加える。

1-2.略 史

昔の「鬧天宮」「安天会」: 反逆児・孫悟空が天界によって鎮圧される。

現行の「(大)鬧天宮」: 孫悟空側の天界側に対する勝利、凱旋で終わる。

(1)清朝: 張照の『昇平宝筏』第一本の一部。

(2)民国: 清末まで崑曲と乱弾の各劇団の人気演目であった。民国期に入ると上演は下火になったが、音楽や内容、セットなどを改編すれば再び人気演目になる、と目されていた。

『戲考』第三十八冊「鬧天宮」冒頭の説明に「孫行者鬧天宮一劇、往昔崑乱各班、伝演頗多、近十余年来、則如広陵散矣」「全劇劇文、大都用噴唢吹腔者多、以近来时尚而論、若将此劇、改用新機関、新佈景、皮簧新唱白、則其受社会歡迎可操券也」とある。

(3)新中国: 京劇俳優・李少春、京劇作家・翁偶虹らによる改編本がスタンダードになる。

『京劇叢刊』第八集(1953年)に収録する脚本「鬧天宮」の「前記」によると、旧来の原本を改編した大きな3つの点として、(1)桃を盗み食いする孫悟空と、桃を摘む仙女たちとのやりとりを短縮した、(2)旧本では最後の大立ち回りの場面で戦いごとに李天王が観戦して「北曲」を唱ったが、新本では開戦後の李天王の歌詞を削除し、孫悟空が天兵天将と連戦するようにした、(3)旧本では最後に孫悟空が負けて捕虜となるが、新本では孫悟空側が勝利して花果山に帰るようにした、という点を挙げている(4-1.附録(1)参照)。

2-1.歌詞の比較対照(1) 版本一覧

清朝宮廷演劇の『昇平宝筏』脚本と比べると、後世の民間の「鬧天宮」系脚本はおしなべて内容が短く、収録曲にも出入りがあり、大きく異なる。ただ、現行の京劇「(大)鬧天宮」の中には、『昇平宝筏』以来、連綿と受け継がれてきた曲も残っている。

一例として、李天王が唱う「点絳唇」の曲牌の唱段と、それに続く詩を取り上げ、『昇平宝筏』以来の字句の変遷を分析し、考察を加える。これは、天界の総大将たる李天王が、孫悟空との決戦の前に唱うもので、天の神々が舞台上に集結するという視覚的な絢爛美ともあいまって、「鬧天宮」の見せ場の一つとなっている。

以下、次の9種類の版本に載せる歌詞を比較対照する。【 】内は筆者が便宜的につけた略称である。

- 【大阪】・・・『大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』』（東北大学出版会、2013年）より、第一本第十七齣。
- 【故宮】・・・故宮本『昇平宝筏』第一本第十六齣。胡勝・趙毓龍校注『西遊記戯曲集』（遼海出版社、2009年）より。「今拠『古本戯曲叢刊九集』故宮博物院図書館所蔵清内府鈔本、参照中国国家図書館所蔵二十卷清鈔本校録。」（同書 p192）
- 【車総】・・・車王府総講本。『清蒙古車王府蔵曲本』第五十八函第三冊に収める「鬧天宮総講」より。（北京古籍出版社、1991年刊の影印本を参照）
- 【車全】・・・車王府全串貫本。『清蒙古車王府蔵曲本』第五十八函第三冊に収める「鬧天宮全串貫」より。
- 【梨園】・・・『梨園集成』（光緒6年=1880年）東京大学東洋文化研究所の雙紅堂本（東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫 <http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/>）。
- 【戲考】・・・中華図書館版『戲考』（1913年～1925年）第三十八冊「鬧天宮」。影印本『戲考大全』5（上海書店、1990年）
- 【叢刊】・・・中国戯曲研究院編『京劇叢刊』第八集（新文芸出版社、1953年、上海）
- 【中院】・・・「中国京劇院出国演本 大鬧天宮」1979年来日公演時のスタッフ用脚本。
- 【北院】・・・北京京劇院「京劇西遊記 孫悟空大鬧天宮」2012年6月の来日公演時のパンフレットに載せる日中対訳の脚本より（主演：李丹、詹磊）。

上記の順番は、大まかに見た時代順である。『昇平宝筏』2種（【大阪】【故宮】）は清朝中期、『車王府抄本』（【車総】【車全】）は清朝後期、『梨園集成』は清末、『戲考』は民国初年、『京劇叢刊』以降は中華人民共和国の現行版、と見なしてよいであろう。

ただし、同じ『昇平宝筏』でも【大阪】と【故宮】のどちらが古いか、また、同じ『車王府抄本』でも【車総】と【車全】のどちらが古いか、の論考については、小論では踏み込まない。ここでは便宜的に、【大阪】【故宮】、【車総】【車全】の順に並べる。

なお、中華図書館版『戲考』の刊行開始年については、中国では1915年説が一般的だが、ここでは松浦恆雄「民国初年における『戲考』の文化的位置」（2009）の1913年説に従う。また、巻末附録の【大阪】の写真は、東北大学出版会『大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』』（2013年）のものである。

2-2.歌詞の比較対照 (1)
李天王(ら)が唱う点絳唇の歌詞

A	B	C	D	E
【大阪】	統領熊羆、軍威嚴密、尊天帝、殲厥渠魁、掃尽妖魔輩。			
【故宮】	統領熊羆、軍威嚴厲、遵天帝、殲厥渠魁、掃尽么麼輩。			
【車総】	十万熊羆、星辰齊集、遵天帝、殲厥渠鬼、掃尽如斯輩。			
【車全】	十万熊羆、星辰齊集、遵天旨、殲滅渠魁、掃尽如斯輩。			
【梨園】	十万雄兵、星宿齊集、尊天地、要滅除魁、掃尽如斯輩。			
【戲考】	十万雄兵、星宿齊集、尊天地、要滅除魁、掃尽如斯輩。			
【叢刊】	十万熊羆、星辰齊集、尊天帝、剿滅渠魁、掃尽如斯輩。			
【中院】	十万熊羆、星辰齊集、尊天地、剿滅渠魁、掃尽如斯輩。			
【北院】	十万熊羆、星辰齊集、尊天地、剿滅渠魁、掃尽如斯輩。			

各原本の字体や句読点は加藤徹が適宜、改めた。歌詞の意味は以下のとおり。

『昇平宝筏』（【大阪】）^{ゆうひ} 熊羆を統領し、軍威は嚴密なり。天帝を尊び、^{そ きょかい つく} 厥の渠魁を殲し、^{やから} 妖魔の輩を掃尽せん。→ 勇士たちを率いて、わが軍の威容は嚴密である。天帝を尊び、かの賊軍の頭目（孫悟空）を殲滅し、妖魔の輩を掃蕩しよう。（【故宮】の違う部分）…軍威は嚴厲なり。天帝に^{したが} 遵ひ、…^{ようま} 么麼（= 么麼）の輩を掃尽せん。→ …わが軍の威容は嚴かである。天帝のご命令を遵守して、…取るに足らぬ輩を掃蕩しよう。

京劇「大鬧天宮」（【中院】）^{せいしん} 十万の熊羆、^{ひと} 星辰、^{つど} 齊しく集ふ。天地を尊び、渠魁を^{そうめつ} 剿滅し、斯くの如き輩を掃尽せん。
→ 十万の勇猛なる星々が整列して集結した。天地の神を尊び、かの賊軍の頭目を掃滅し、このような輩を掃蕩しよう。

2-3.歌詞の比較対照 (2)
李天王が唱える七言詩

F	G	H	I
【大阪】	大将桓桓出玉庭、神兵十万列連營。天羅地網安排定、管取乾坤永太平。		
【故宮】	大将桓桓出玉庭、神兵十万列連營。天羅地網安排定、管取乾坤永太平。		
【車総】	大将桓桓出玉庭、雄兵十万列連營。天羅地網安排定、管取妖猴一命傾。		
【車全】	大将桓桓出天庭、天兵十万列連營。天羅地網安排定、管取孫猴一命傾。		
【梨園】	大将綏綏夫玉廷、天兵十万列連營。天羅地網安排定、管取天猴一命傾。		
【戲考】	大将綏綏夫玉廷、天兵十万列連營。天羅地網安排定、管取妖猴一命傾。		
【叢刊】	（欠）		
【中院】	大将綏綏出御庭、神兵十万列連營。天羅地網安排定、管取妖猴一命傾。		
【北院】	大将款款出御庭、神兵十万列連營。天羅地網安排定、貫取妖猴一命傾。		

E と F の間の台詞(がある場合)は省略する。詩の意味は以下のとおり。

『昇平宝筏』(【大阪】【故宮】) 大将、^{かんかん}桓桓として^い玉庭を出づ。神兵十万、連營に列す。天羅と地網と安排し定まり、^{けんこん}管取す乾坤の永く太平なるを。

→ 桓桓たる武威をもつ大將軍が、天の朝廷から出ると、ずらりと並ぶ陣營に、十万の神兵が整列している。敵を捕らえる網を、天と地にぬかりなくめぐらした。必ずや、世界の恒久平和を保ってみせよう。

京劇「大鬧天宮」(【中院】) 大将、^{ぎよてい}緩緩として^{ぎよてい}御庭を出づ。神兵十万、連營に列す。天羅と地網と安排し定まり、^{ようこう}管取す妖猴の一命傾くを。

→ 大將軍がゆったりと天帝の朝廷から出ると、ずらりと並ぶ陣營に、十万の神兵が整列している。敵を捕らえる網を、天と地にぬかりなくめぐらした。必ずや、孫悟空めの一命を取ってみせよう。

2-4. 歌詞の各句の比較分析

以下、9種類の版本のそれぞれの語句を比較対照し、変遷を分析する。

A 「統領熊羆」から「十万熊羆」へと、大きく変化した。

『昇平宝筏』では、登場直後の天王が独唱で、「熊羆」たる天兵天将を「統領」する、と述べる。後の時代の演出では、ここは李天王と天兵天将の斉唱、あるいは李天王より先に天兵天将の一部だけ先に登場し斉唱、という風に変化する。天界の総大将ではない普通の神々が「統領する」と唱うのは不適切なので、「十万熊羆」と改めたのであろう。

「点絳唇」の曲牌の旋律では、最高音は冒頭の一文字である。声楽的には、広母音「ア」や「オ」より、狭母音「イ」のほうが高音を歌いやすい。歌い出しの一文字が「統」よりも「十」であるほうが、俳優にとって少し楽になる。脚本の歌詞改編の背景には、このような音楽的な力学も働いている可能性がある。

【梨園】【戲考】は、「熊羆」を近音の「雄兵」に作るが、「兵」は脚韻から外れてしまう。これは【車総】G「雄兵」からの転移かもしれない。この他の箇所でも、【梨園】【戲考】は、後代に受け継がれなかったイレギュラーな改編が散見される。

B 同じ『昇平宝筏』でも【大阪】は「密」、【故宮】は「厲」と微妙に違う。

【梨園】【戲考】の「星宿」という語は二つの意味があり、広義では「星官」(普通名詞)、狭義では「二十八宿の一つである、南方朱雀の星宿」(固有名詞)で、ここでは広義の意。意味的にも、音の響きから言っても、ここは二つの「陽声」を重ねた「星辰」のほうが良いと思われる。

『昇平宝筏』の李天王は独唱で「統領熊羆、軍威嚴密(厲)」が天界の統制美を自賛するが、京劇系は天の神々が斉唱で「十万熊羆、星辰齊集」と絢爛美を強調する。

C 「遵」と「尊」、「天帝」と「天旨」「天地」などが入り乱れている。字義からすると、ここは「尊天帝」(天帝を尊ぶ)が良い。清末の【梨園】と民初の【戲考】は誤って「尊天地」としたが、新中国の建国直後の【叢刊】は正しく「尊天帝」と直った。が、文革後には、なぜか再び清末の「尊天地」に戻ってしまった。

D 「殲厥→殲滅→要滅→剿滅」という変化の流れが、すっきりと見て取れる。

『昇平宝筏』の「殲厥渠魁」は、『尚書』胤征の語句「殲厥渠魁、脅從罔治」をふまえる。四書五経に精通した読書人なら暗記している有名な言葉だが、俳優や観客も含め一般人には難しい言葉である。そのためもあってか、時代が降るほど『尚書』から離れた平易な表現に変化し、【車全】は「殲滅」、【梨園】【戲考】は「要滅」、新中国の【叢刊】以降は「剿滅」になった。

賊徒の頭目を意味する「渠魁」という語は、ここでは孫悟空を指す。【車総】が「渠鬼」と誤記し、【梨園】【戲考】がやや近音の「除魁」に作る他は、全て「渠魁」である。

E 【大阪】と【故宮】で異なる箇所である。

【大阪】「妖魔輩」は「妖魔のやから」。**【故宮】**「么麼(=么麼。yāomó)輩」は「取るにたらぬ、ちっぽけなやから」の意。「妖魔輩」は警戒を要する難敵だが、「么麼輩」は取るにたらぬ小物。同音語ながらニュアンスは反対である。

【故宮】「厥の渠魁を殲し、么麼の輩を掃尽せん」は、「渠魁」と「么麼輩」、すなわち巨悪と小物を対置している。これは『尚書』胤征の原文「殲厥渠魁、脅從罔治」で、「渠魁」と「脅從」が対比的に述べられるのと対応するのかもしれない。

後世の民間の脚本では、巨悪たる「渠魁」とセットになるのは、「如斯輩」(かくのごときやから)か、「如廡輩」(廡のごときやから)である。「廡」と「廡」は異体字の関係で、字義はいずれも「下僕」「小者」「つまらぬもの」。「如廡輩」は、単に同音の「如斯輩」を当て字的にそう書いたのか、それとも、「廡」の字は【故宮】の「么麼輩」の字義を幾分か継承しているのだろうか。

F 「大将桓桓出玉庭」の「桓桓」は、武勇に優れた様を示す古雅な漢語。**【車総】【車全】**までは正しく「桓桓」が受け継がれたが、【梨園】以後は「綏綏」「綏綏」「款款」などと誤って受け継がれた。北京語では「桓」huán と「綏」huǎn、「款」kuǎn は近音である。「綏綏」と「綏綏」は、いずれも余裕綽々でゆったりとした様を示す擬態語。「款款」は、まごころがこもった様。字義から見ても、七言絶句の平仄格式から言っても、ここは「桓桓」が相応しい。

「玉庭」と「御庭」も、同音ゆえの混同が見られる。

例によって、【梨園】【戲考】の「綏綏夫玉廷」だけ浮いてしまっている。「綏綏」は「綏綏」の誤記の可能性が、また「夫玉廷」は「天玉廷」の誤記の可能性がある。

G 「神兵→雄兵→天兵→神兵」という変化の流れの循環が興味深い。

【車全】【梨園】【戲考】は「天兵」に作るが、次の句頭の「天羅」と「天」の字が重複してしまい、七言絶句の同字禁制に抵触してしまう。

【叢刊】以降の現行の京劇系は、清末民初の脚本よりも、かえって古く正しい形を継承している。

H 『昇平宝筏』以来、一貫して語句の同一性が保持されている珍しい箇所。戯曲作品においては、何の外連も無いこのような語句が、かえって改編を免れる傾向がある。

I 「管取乾坤永太平」から「管取妖猴一命傾」へと変化した。

宮廷演劇たる『昇平宝筏』の李天王は「必ずや、世界の恒久平和を保ってみせよう」と、皇帝の前での上演に相応しい吉祥の言葉を述べる。

民間脚本の李天王は「必ずや、孫悟空めの一命を取ってみせよう」と、勇ましくも殺気だった言葉を述べ、観客にこの後の熱戦を期待させる。

孫悟空の呼び方は、「妖猴」「孫猴」「天猴」の順に丁寧になる。【車総】の李天王は「妖猴」と罵倒したが、【車全】では「孫猴」とやや穏当になり、【梨園】に至っては「天猴」という、まるで李天王が孫悟空を天の一員と認めるかのような表現になった(天猴は、「妖猴」→「天猴」→「天猴」という誤りの連鎖を辿った可能性もある)。他の箇所では【梨園】に追随する【戯考】も、さすがに「天猴」は継承せず、【車総】以来の「妖猴」に戻した。Gの「神兵→雄兵→天兵→神兵」と同様、歌詞の継承には自己修復的な自浄作用が働くことの一例である。

「管取」は、【京院】だけ「貫取」と誤る。

3. むすび

清朝宮廷演劇たる『昇平宝筏』の歌詞を始点として、現行の京劇脚本まで約三百年にわたる歌詞の変遷を見ると、ダイナミックな流れが鮮やかに浮かび上がる。

『昇平宝筏』の李天王は、世界平和の守護者であった。彼が唱う「統領」「軍威」「管取乾坤永太平」などの語句に現れているとおり、戦争の目的は、世界の秩序と平和を守ることである。李天王の立場は、孫悟空より一段高い。

「車王府抄本」以降の李天王は、より直接的な戦闘指揮官として、戦争目的を「管取妖猴一命傾」つまり「打倒孫悟空」であると宣言する。京劇系の李天王は、孫悟空の好敵手となるべく相手と同じ目線まで降りた、と言えるかもしれない。

たしかに、『昇平宝筏』の李天王も「殲厥渠魁」(渠魁は孫悟空個人を指す)と唱った。しかし「殲厥渠魁」は、儒教の古典『尚書』の語句そのままの引用であり、古雅な類型的表現であるため、印象はソフトである。

後の京劇系では、李天王(と配下の天兵天将たち)は古典を引用せず、自分自身の言葉で「剿滅渠魁」と斉唱する。表現は、より通俗的かつ直接的である。

宮廷演劇たる『昇平宝筏』は、皇帝および統治者の目線で、反乱の鎮圧と統治秩序の維持を描く。清朝の皇帝の統治下では、「鬧天宮」を「大鬧天宮」と称することも、憚られたであろう。旧来の「鬧天宮」は、孫悟空が釈迦と天界に負ける「安天会」という結末を

前提としていた。

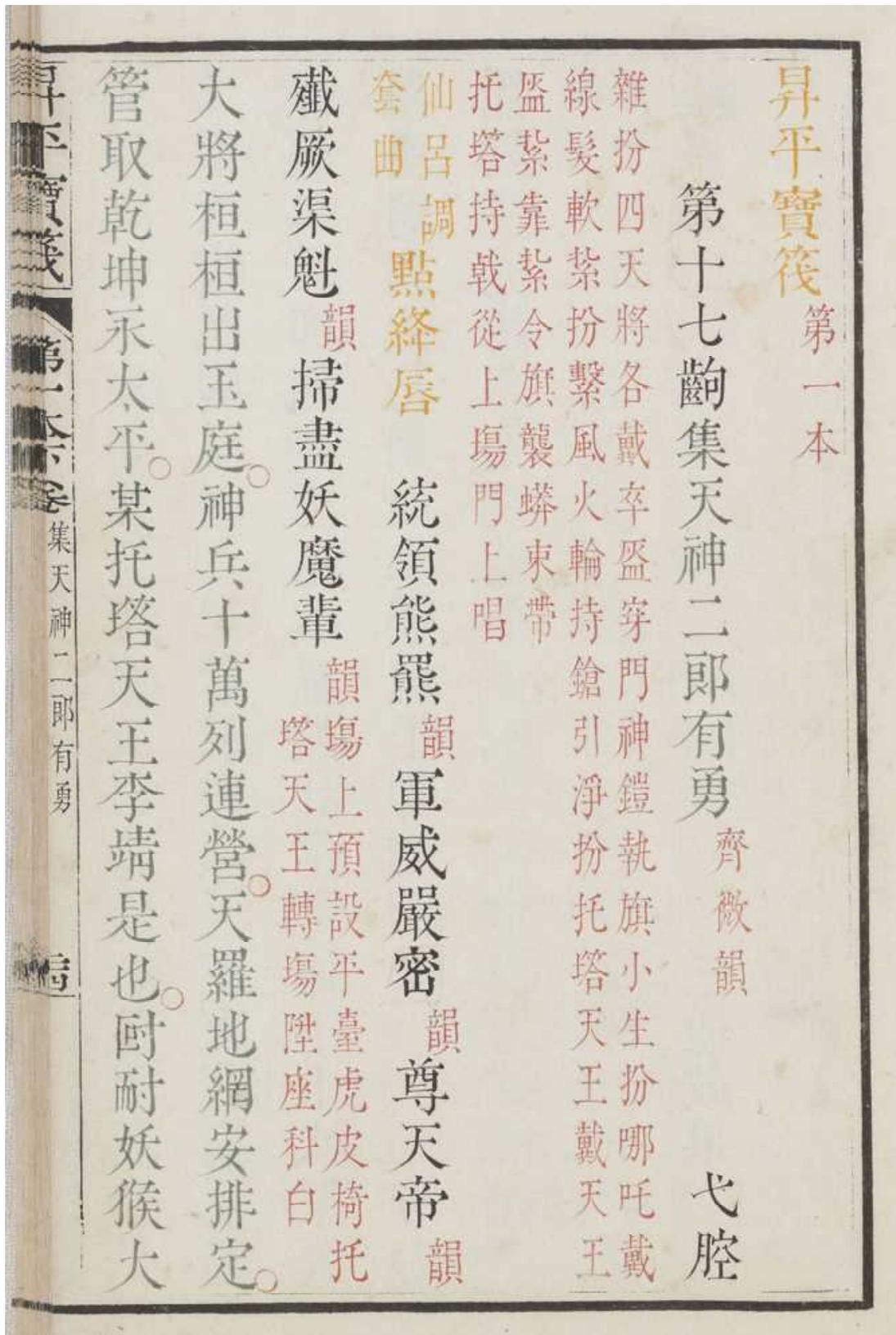
新中国の社会主義革命により、天帝と孫悟空の正邪の立場は逆転し、「鬧天宮」は孫悟空が天界に勝利して終わる「大鬧天宮」に改編された。だが、その逆転の力学は、ある日突然に生まれたものではない。

「鬧天宮」における孫悟空と李天王の関係は、『白蛇伝』『水漫金山』における白素貞と法海和尚の関係に似ている。『白蛇伝』でも、すでに清末から、妖魔たる白素貞のヒロイン化が進み、それと反比例して法海和尚が悪役化する傾向が見られ、新中国の革命により正邪の逆転が決定的になった。「鬧天宮」においても、新中国の革命よりずっと前から同様の力学が働き始めていたことが、『昇平宝筏』を始点にすえた分析によってわかる。

このほか、京劇脚本の字句の変遷が単線的ではないこと、例えば清末の『梨園集成』より、新中国の『京劇叢刊』のほうが、かえって古い表現を保存している箇所も多いことなども、『昇平宝筏』まで遡ることで明らかになる。

清朝宮廷演劇の脚本は、それ自身が有する歴史的な価値はもちろんのこと、近現代の中国演劇を考察する上でも有用な資料である。

【大阪】『大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』』（東北大学出版会、2013年）より。



昇平寶筏

第一本

第十七齣集天神二郎有勇

齊微韻

弋腔

雜扮四天將各戴卒盛穿門神鎧執旗小生扮哪吒戴線髮軟紫扮繫風火輪持鎗引淨扮托塔天王戴天王盔紫靠紫令旗襲蟒束帶托塔持戟從上場門上唱

仙呂調 套曲

點絳脣

統領熊羆

韻

軍威嚴密

韻

尊天帝

韻

截厥渠魁

韻

掃盡妖魔輩

韻

場上預設平臺虎皮椅托塔天王轉場陞座科白

大將桓桓出玉庭。神兵十萬列連營。天羅地網安排定。

管取乾坤永太平。某托塔天王李靖是也。耐耐妖猴大

昇平寶筏

第一本

集天神二郎有勇

七

頭場上雜扮六丁六甲二十八宿九曜星君馬趙溫關巨
灵二郎哪叱金叱木叱仝上八云童上天王李靖上点
絳唇唱十萬熊羆星辰齊集遵天帝殲厥渠鬼掃尽如
斯輩中神仝白 中天將打躬 天王白 站立兩傍中仝白
啊 天王白 大將桓桓出天庭天兵十萬列連營天羅地
網安排定管取孫猴一命傾巨耐妖猴孫悟空大鬧蟠
桃会私窃老君卅玉帝大怒命俺督領天兵十萬二十
八宿九曜星君十二元辰四大天王東西南北星斗灌

哪叱上跳完申引淨上淨唱点絳唇 十万熊黑：：星

辰齊集遵天旨殄威渠魁掃尽如斯輩：：上高座白

大将桓：出玉庭雄兵十万列連營天罗地網安排定

管取妖猴一命傾某托塔天王李奉御直前到花果山

水簾洞擒拿妖猴哪叱 生白 有淨白吩咐搥鼓三頓諸

天將上台听点 生白 得令呀父王有令搥鼓三頓諸天

將上台听点 内搥鼓完申上見个全白 諸天將打躬

白 諸天將 申白 有淨白 俺奉御旨率領尔等擒拿妖猴

諸天將也可

就此同上灵霄奏聞玉帝請登迷天大罪猴頭造同向

玉塔奏玉表白准脩天羅地網擒野天下四六亂四安當寧字四星

點降十萬雄兵星宿齊集尊天地要滅除魁掃盡如厮宿壽

輩終眾將忝天站立兩廂登大將綏匕夫玉延天兵十

萬列連營天羅地網安排定管取天猴一命頃吾乃托

塔天王是也所耐天猴大鬧蟠桃會私窃老君丹玉帝

大怒命俺督領天兵十萬九耀星君二十八宿十二元

辰六丁六甲東南西北星斗四大天王羅猴都喪門吊

客貫口二郎神三子哪叱月白星等 來此花菓山水

水蓮洞偷下一十八架天羅地網擒拿天猴眾天將登

吾奉玉旨擒拿天猴不齊心勢力掃除天洞分班听

差登混江龍俺这里神通奇異天氣不語離廣非俺这里

祥云刑羅他那里冷霧淒匕俺这里一片雄心

多智慧他那里千般魔力少神机翼君帶領羅猴星呵

唱 任在那山前迎战使法力馬得令下趙天君帶領計

都星呵唱任在那山後運動机趙得令下温天君帶領

月客星呵唱任在那山右接他的魂魄超隨温得令下

划天君帶領吊客星呵唱任在那山右將他灵魂魄進

隨劉得令下巨灵神淨有天你等前部先鋒帶領二十

八宿有有天任將他巢穴擒倒淨得令下你為都救應

第 三 十 八 冊

鬧 天 宮

七 六 六

（接唱）俺俺俺。俺不過高擎酒几標。俺再再再。再把金母略略嚼。請了。請請請。
俺和恁分手再相拋。（淨內白）呌。猴頭那里走。（生逃下淨上白）嚙。把天門的。
（付白）何人叫天門。（淨白）可曾看見孫猴兒過去。（付白）過去了。（淨）你爲何。放
他過去。（付白）他說赴蟠桃會而來。故此放他過去。（淨白）呃。被他攆出天門。
就此同上靈霄殿。奏聞玉帝。請。（唱）（合四生）迷天大罪猴頭造。同向玉堦奏玉
表。準備天羅地網擒野妖。（全下四大凱四文堂四童子四星宿四天將）（哪吒巨靈
神引天王上全點降）十萬雄兵星宿齊集尊天地。要滅除魁。掃盡如斯輩。（吹打
天王上台子衆白）衆將參見。（王白）站立兩廂。（衆應）大將綏綏夫玉廷。天兵十萬
列連營。天羅地網安排定。管取妖猴一命頃。吾乃。托塔天王是也。叵奈妖猴。
大鬧蟠桃會。私竊老君丹。玉帝大怒。命俺督領天兵十萬。九耀星君。二十八宿
。十三元辰。六丁六甲。東南西北星斗。四大天王。羅猴計都喪門吊客。貫日二郎
神。二子哪吒。月白星等。來此花菓山。水瀛洞。佈下一十八架天羅地網。擒拿
天猴。衆天將。（衆應）吾奉玉旨擒拿妖猴。爾等齊心勢力。掃除妖洞。分班聽差
。（衆應天王唱）（混江龍）俺這里神通奇異。妖氣不語離廣非。俺這里祥云緊隨。
（衆喊天王接唱）他那里冷霧淒淒。俺這里一片雄心多智慧。他那里千股魔力少神

趙天君：方才過去了。
巨靈：嘿，被他詐出天門！你我同上靈霄，奏知玉帝便了！
趙天君：請！

(合唱「煞尾」)

彌天大罪猴頭鬧，

同上靈霄奏玉表。

準備天羅地網，掃蕩猴妖。

請！

(同下)

第五場

(六丁、六甲上)

衆：(唱「點絳脣」)

十萬熊羆。

去天王觀戰時的唱詞。

(一) 原本中，開打後每打一場由天王唱北曲一支，現改爲悟空連續打敗所有天兵天將，並刪

一些削減。
(二) 原本中悟空在園中偷吃蟠桃，摘桃仙女發現桃被偷盡等情節，現均改爲暗場，唱詞也有
(三) 原本的結尾是悟空終於被擒，現改爲悟空得勝回山。
這個本子是由中國京劇團演員李少春整理的。並已在國內及國外演出。

(四) 天君、青龍、白虎、南斗、北斗、鴻鸞、天喜、月孛、九曜上

衆：(接唱) 星辰齊集。

(二郎、哪吒、巨靈、四雲童、李天王、風、雨、雷、電上)

李天王：(接唱) 尊天帝，勦滅渠魁。

(李天王上高台)

衆：(接唱) 掃盡如斯輩！

李天王：馬、趙、溫、劉四天君聽令！

衆：在。

李天王：帶領青龍、白虎。

衆：在。

李天王：隱在山前埋伏者！

(唱「混江龍」)

隱在山前，迎戰施法力！

衆：領法旨。(下)

前記

第十场

聚 灵 台

(六丁、六甲上，舞蹈，唱“点绛唇”)

8 7 6.5 7 4
十万熊罴——

(四天君、青龙、白虎、罗猴、计都、鸿鸾、天喜、月孛、
九耀同上)

33 1 3 2 5
众 (接唱) 星辰齐集。

—35—

(二郎、哪吒、巨灵、李天王、风、雨、雷、电同上)

李天王 (接唱)

尊天地，剿灭渠魁。

(李天王上高台)

66576 332317
众 (接唱) 扫尽如斯辈

李天王 大将缓缓出御庭，

神兵十万列连营，

天罗地网安排定，

管取妖猴一命倾。

可恨妖猴，大闹蟠桃宴，私窃老君丹，玉帝大怒，
命我带领天兵十万，(去至花果山水帘洞)擒拿妖猴。马
赵温、刘四天君所令。

4-2. 附録(2) 映画の中で再現された清朝宮廷演劇

1984年の中国映画「垂簾聽政」(李翰祥監督。邦題「西太后」)の中で、熱河に蒙塵中の咸豊帝が、自分の誕生日に、三層の戲台で「鬧天宮」を觀劇する場面がある。この、清朝宮廷演劇を再現した場面の撮影は、故宮の暢音閣で行われた。

三層の戲台の、最上階の舞台。玉帝と金星が登場。



二階の舞台では、李天王が「十万熊羆…」と唱う。



一階の舞台に、天將天兵が登場。「星辰齊集…」と齊唱。



二階の舞台上で「尊天帝、剿滅渠魁・・・」と唱う李天王。



一階の舞台に孫悟空の軍団が登場。咸豊帝は、自分を天帝の立場に重ねて観劇。



天兵天将に追いつめられる孫悟空。悟空の役者は、滑車の縄で宙づりになり、如意棒を振り回しながら三階から一階まで吹き抜け部分を降下する。



4-3. 附録(3) 主な来日公演

1956年、梅蘭芳らの京劇来日公演で、李少春らが「鬧天宮」を上演。→ P.13【叢刊】

1977年、中国京劇院(現在の中国国家京劇院)一団が再演。

脚本改編は翁偶虹、音楽の編曲と補作は劉吉典・許俊徳。

1979年、中国京劇院三団の来日公演で、李光らが「大鬧天宮」を上演。→ p.14【中院】

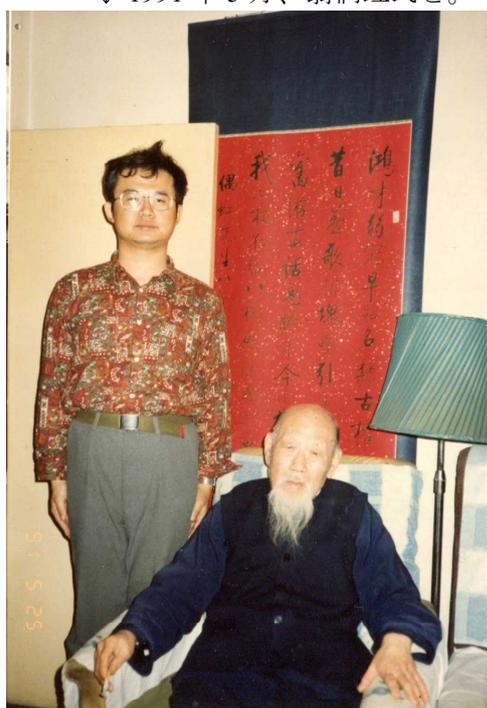
2011年、中国国家京劇院が来日、京劇研究会(日本)との合同公演で「大鬧天宮より『水簾洞・御馬監』」を上演。

1979年の来日公演の李天王。↓俳優は袁国林氏。季刊『銀花』41号より。



↓ 1991年5月、翁偶虹氏と。

1990年11月、袁国林氏(曹操)と。↑



2011年9月、中国国家京劇院の石山雄太氏と。